日本家政学会誌　Vol. 68　No. 11　609～620（2017）

資　料

「食事の連絡帳」を媒介とした保育者による保護者支援
―遊び食べや好き嫌いが激しい１歳半の男児Ｙの事例から―

伊藤　　優[1*]

Using the Parent-Teacher Contact Notebook to Support Parents: A Case Study of a One-Year-Old Child

Yu ITO[1*]

This study examines the impact of bi-directional communication on parental support levels via a parent-teacher contact notebook of a child's meals. Data collected via the communication through the contact notebook was divided into one of three categories depending on content: statements of fact, personal responses, and questions. An examination of the teacher and parent exchanges was performed to determine how these three categories of communication altered the interactions between the parent and the teacher. Differences in communication categories were found to affect the manner in which dialogue continued between the parent and the teacher. Communication regarding meals in the parent-teacher contact notebook led to improvement in the parents' psychological state, mutual parent-teacher understanding, and greater communication between the parents and the teacher about the child's general activities related to eating behaviors. An analysis of this study revealed that the teacher revised the contact notebook's content to include not only details regarding the child's meals, but the child's other activities and behaviors as well.

Key words：parent-teacher contact notebook of a child's meals 「食事の連絡帳」，parent-teacher relationships and understanding　保育者と保護者のやりとり，nursery school　保育所，Consuming a meal 食事量，child care　保育

1. はじめに

近年夫婦共働き家庭の増加に伴い，保育所の利用が多くなっている中，保育所を利用している保護者の多くは子どもの食事に困難を抱え，共働きで限られた時間の中でも子どもの食事の問題を改善したいと切望しているものの，適切な改善方法がわからないことが報告されている[1)2)]．このような保護者の状況をふまえ，厚生労働省が平成24年に示した「保育所における食事の提供ガイドライン」において，保育士は保護者に対して食事に関する保護者支援を行うことが求められている．保護者の食事場面での子どもに与える影響の大きさが報告されているとともに[3)4)]，子どもの食事に問題を持つ保護者は育児不安が高く，精神的に不安定であることも指摘されていることから[5)]，保育士は保育所の給食場面における子どもへの支援だけでなく，家庭と連携を取りながら，保護者支援にも積極的に関わっていくことが求められている．

特に，３歳未満児は味覚の形成時期，道具の使用開始期，仲間と食事を楽しみ始める時期であることからも，保育士・保護者のきめ細かな配慮・援助が求められている[6)]．一方で，保護者は３歳未満児の食事に関して強い不安を抱いていることが報告されている[7)8)]．そのため，保育士は日々の子どもの食事に関して，子どもと保護者に継続的・双方向的に支援していく必要がある．

保育士と保護者の間で日常的・双方向的に情報を受け渡しするためにも，子どもの送迎時や行事時などに両者が直接会って行う会話が重要となる．しかし，松尾[9)]は，早朝・延長保育を利用する保護者にとって，送迎時にクラス担任がいないことも多く，クラス内で起こった出来事を担任が保護者に直接伝えることができない現状を報

所属機関名：[1]就実短期大学
[1]Shujitsu Junior College
原稿受付：平成28年10月11日　　原稿受理：平成29年７月19日
* To whom correspondence should be addressed　　E-mail：yitou@shujitsu.ac.jp

Copyright © 2017 The Japan Society of Home Economics

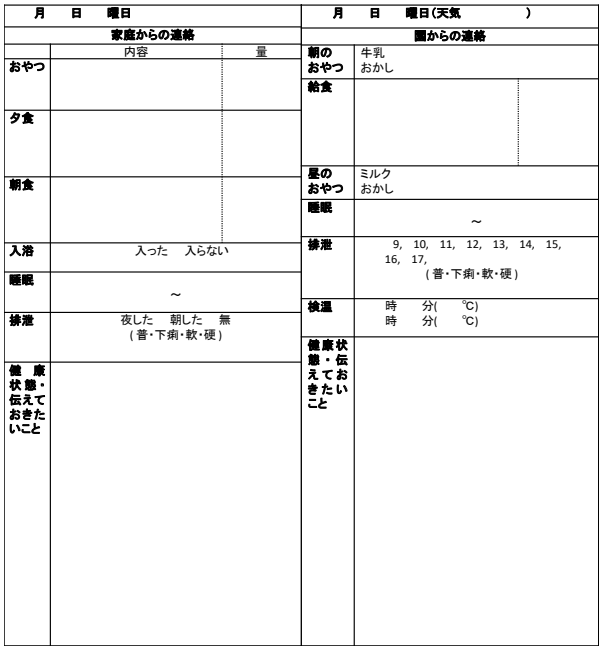
告している．また，時間に制限のある保育所を利用する保護者や一度に多くの子どもに対応している保育士は，会話をする時間的ゆとりがない場合も多く，十分な情報交換は困難である[10]．さらに，配布物は保育所から家庭への一方向的な情報の提供になっているため，保育士が家庭での子どもの情報や保護者の考えを知ることは難しい[11]．このような現状の保育所において，保育士が保護者と連携して子どもを支援する際，日常的に用いられているものとして連絡帳が挙げられる．

半澤[12]は，連絡帳のやりとりが保護者の不安を和らげることや，連絡帳を通したやりとりの積み重ねが，保育士と保護者との信頼関係の構築に寄与する可能性があることを指摘している．また，林[13]は，連絡帳が保護者と保育士の相互理解の進展の記録や，保護者支援の重要な方法のひとつとなりうることを明らかにしている．これらの先行研究から，保育士と保護者が連携する時に連絡帳を媒介とすることで継続的・双方向的な連携を行いやすくなるのではないかと考えられる．

しかし，連絡帳に関する先行研究では，保育士や保護者の記述スタイルや連絡帳に対する両者の意識を明らかにしたものはあるものの[14][15]，その時々の子どもの行動や保護者の状況も考慮した上で，保育士と保護者の両者のやりとりを検討してはいない．保育士は子どもや保護者の様々な情報を元に支援を行っていると考えられることからも，子どもの行動の変化や保護者の状況を考慮して検討する必要があるだろう．

そこで，本研究では，遊び食べが激しくなる１歳半の子どもを持つ保護者と保育士による連絡帳でのやりとりを食事に焦点を当てて検討することによって，保育士の子どもの食事に関する連絡帳を通した保護者支援の工夫や意図を明らかにすることを目的とする．特に，乳児に関する保育所と家庭の連携の必要性は示されているものの，食事は日常的なものだからこそ，保育関係者と保護者間で相違を生じやすいことも報告されている[16]．そのため，本研究で保育士の連絡帳記述時の工夫点を明らかにすることは，保育所を利用している保護者との連携を困難に感じる保育士にとって，保護者支援を行う際の一助となると考えられる．なお，ここでいう連絡帳を通したやりとりとは，一つの話題に関する保育士と保護者の情報の往還のことである．

その際，本研究では「食事の連絡帳」を対象とする．H県にあるＴ保育所（私立保育所）は「食事の連絡帳」を用いて子どもの食事に関して保護者に支援を行っている．「食事の連絡帳」とは，食べたものや食べた量などを記述する欄（以下，上段）と日常の気づきや相談などを記述する欄（以下，下段）を設け，保護者に対しては最低限上段を記述するだけに依頼をとどめ，保護者の負担を減らしている（資料１）．「食事の連絡帳」を用いた保育士とのやりとりが，保護者の子どものとらえ方に変容をもたらす契機となることも報告されており[17]，食事に関して保育士がどのように保護者支援を行っているのか検討しやすいと推察されることから，本保育所の「食事の連絡帳」を通した保育士と保護者のやりとりを検討する．


月　日　曜日

家庭からの連絡		
	内容	量
おやつ		
夕食		
朝食		
入浴	入った　入らない	
睡眠	～	
排泄	夜した　朝した　無 (普・下痢・軟・硬)	
健康状態・伝えておきたいこと		

月　日　曜日(天気　　)

園からの連絡	
朝のおやつ	牛乳 おかし
給食	
昼のおやつ	ミルク おかし
睡眠	～
排泄	9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, (普・下痢・軟・硬)
検温	時　分(　℃) 時　分(　℃)
健康状態・伝えておきたいこと	

資料１．「食事の連絡帳」

2. 方　法

(1) 調査対象：本研究ではＴ保育所に通う男児Ｙ（調査開始時：１歳６ヶ月，兄弟姉妹なし，母親と父親の三人家族）の「食事の連絡帳」を通した保育士と母親（以下母親Ｋとする）のやりとりを分析対象とする．男児Ｙの「食事の連絡帳」を分析対象とした理由は以下の通りである．

男児Ｙは入所当初（生後７ヶ月）離乳食を一口も食べることができなかったが，調査開始時には家庭・保育所両方で他児と変わらず食べられるようになっていた．しかし，その後，遊び食べや拒否行動が頻繁に出現するようになり，母親Ｋと保育士の双方を悩ませていた．調査期間中，連絡帳を記入していたのは母親Ｋであった．母親Ｋは細かいことをあまり気にしない性格であったが，入所当初，男児Ｙが離乳食を全く食べなかった経験から，男児Ｙの食事に関して強い不安を有している様子が見受けられた．このような経緯から，調査開始時，母親Ｋは「食事の連絡帳」の記述に慣れており，また，インタビューから，「食事の連絡帳」の重要性を強く感じているようであった．

一方，保育所からの連絡帳を記述しているのは，昨年度から引き続き男児Ｙの担任をしている担任保育士（保育経験年数18年）であり，担任保育士は「乳児期の食事を何よりも大事なことと考えており，連絡帳も食事に重点を置いてやりとりできるようにしている」と語り，子どもの食事を重要視していた（以降「保育士Ｏ」とする）．

このように双方が子どもの食事に関する悩みを共有し，改善したいとの願いを共有していることから，家庭と保育所の子どもの様子を把握しながら，保育士の保護者支援について詳細に検討できると考えられる．そのため，男児Ｙの「食事の連絡帳」での保育士Ｏと母親Ｋのやりとりを分析対象とした．

なお，調査開始前に園長，保育士Ｏ，母親Ｋに男児Ｙの連絡帳の記述分析及び観察・インタビューを行うことを説明し，同意を得た上で，研究を進めた．その際，事前に男児Ｙの食事量の変容過程に着目する旨を伝えていた．また，個人が特定されないように，無作為のアルファベットを用い匿名性を担保している．さらに，論文公表に関する倫理的配慮に関しては，「日本家政学会誌投稿論文の倫理的観点に基づく審査」を受け，承認された．

(2) 調査期間と連絡帳記述状況：調査期間は，2014年４月１日から保育士Ｏと母親Ｋの両者が男児Ｙの食事の問題が改善されたととらえた2014年10月初旬までの間とした．連絡帳の総記述日は家庭・保育所共に128日分であり，上段の食事内容や食事量に関しては保育所・家庭ともに毎日記述されていた．下段の自由記述欄に食事に関する記述があったのは，保育所から70日，家庭から75日であった．

(3) 分析方法：母親Ｋと保育士Ｏによる各連絡帳の記述の特徴を検討するため，自由記述欄に記載された一日分の記述の中に，食事に関して複数の話題が含まれている場合は，話題ごとにひとまとまりの事例としてカウントした．その総事例数は156件（保育士記述79件，母親記述77件）であった．自由記述欄に焦点を当てた理由として，以下があげられる．記述者は自由記述欄に記述する際に，その日の子どもの状態に焦点化して，気づいたこと，気にかかったこと，注目したことを想起する．その記述には，保育士や保護者の関心事が反映されることになり，両者の構えや子どもの見方，保育観などが無意識のうちに投影される[18]．これらのことから，自由記述欄の両者の記述を検討することで，保育士と保護者のそれぞれの連絡帳の記述の傾向が浮かび上がるのではないかと考えられる．

そのうち，食事に関する新しい文脈を作り出した記述者を話題提供の発信者（以下，話題提供者）として，その記述を選出し，KJ 法[19] によって分類した．新しい文脈を作り出す話題提供者に着目することで，保育士と保護者が連絡帳に記述する際の食事に関する関心事や課題の特徴を見いだしやすいと考える．なお，分類は筆者と保育所の様子に詳しい協力者の２名で協議しながら行った．

次に，話題提供者の記述をその特徴別に分けた後，保育士Ｏまたは母親Ｋのどちらかが食事に関する話題を記述しても，その一回で話題が途切れて記述が継続しなかった場合は「継続無」，継続した場合は「継続有」とした．さらに，これらの様相ごとに，観察及びインタビューデータも用いながら連絡帳での保育士Ｏと母親Ｋのやりとりを詳細に検討した．

観察及びインタビューの調査期間は，2014年４月から2014年10月初旬まで一週間に一回の割合で保育所のおやつ場面と給食場面を観察した（計21日，約945分）．また，毎回観察後に，保育士Ｏに，男児Ｙの食事の様子，保育士Ｏの男児Ｙや母親Ｋに対する支援について尋ねた．観察及びインタビューを併用することで，連絡帳記述には現れなかった保育士Ｏの母親Ｋや男児Ｙへの支援や，男児Ｙの食事行動の変化，保育士Ｏの連絡帳記述時の意図も示されると推察される．

加えて，連絡帳記述，観察及びインタビューの中で，男児Ｙの食事量に関する事例（連絡帳下段148件，観察13件，インタビュー11件）を，保育士Ｏと共に，家庭と保育所別に時系列に並べた．その後，保育士Ｏに確認をとりながら，同時期における同じ意味あいを有する事例を集約し，それらの意味を包括するようなラベルを作成した．そして，それらを保育所と家庭における男児Ｙの食事量の変容の違いが分かるように再度時系列に並べて図示した．なお，食事量の多少は，連絡帳上段に記されているミルク量及び食事量を元に，保育士Ｏと話し合いながら設定した．

3. 結　果

(1) 連絡帳での母親・保育士の記述の特徴

連絡帳の自由記述欄へ食事に関する話題が記述された全事例数は保育士79件，母親77件でほぼ同数であったが，食事に関する内容の発信を行ったのは母親Ｋからが61件（母親発信の全事例数の79.2%）で保育士Ｏからの発信45件（保育士発信の全事例数の57.0%）より多かった．このことから，保育士Ｏは自分から発信するよりも，母親Ｋの食事に関する内容に対して応答することが多いといえる．

話題提供者による食事に関する記述を KJ 法によって分類した結果が表１である．具体的には，話題提供者の自由記述を意味内容が同様な文章ごとにまとめていったところ，中項目として「食欲」，「薬」，「生活と関連」，

表１．話題提供者による食事に関する記述の分類

大項目	定　義	中項目	具体的記述内容
事実伝達のみ	客観的な情報として認識される子どもの食事の様子．子どもの行動や状態．	食欲	「ジュースとゼリーの食べ具合はよいのですが，その他はほとんど遊びながら食べています」(母親記述)
		薬	「食事も完食し，お薬も飲みました」(保育士記述)
		生活と関連	「給食のカレーライスをたくさん食べ，お昼寝ではカレーライスの玩具を離さず持って眠っていました」(保育士記述)
所　感	事実伝達だけでなく，子どもの食事に関する保育士や保護者の主観的な情報や感想．	子どもの様子	「朝からご飯を「いやだ～」と大泣き．あららどうしましょうです」(母親記述)
		昨日の上段の記述に関して	「昨夜は大好きないちごがたくさん食べられたようですね！よかった！」(保育士記述)
依頼・質問	事実の伝達だけでなく，保護者・保育士それぞれに宛てた子どもの食事に関する依頼及び質問など．	依頼	「少し朝食を持たせますのでお願いします」(母親記述)
		質問	「おやつの時，牛乳をほしがるのですが，家ではどうされていますか？」(保育士記述)

注）大項目名や定義に関しては，宮武・高原[20] を参考にした

表２．食事に関する話題提供者と記述形式別やりとり継続の有無

（実数は件数，( ) 内%）

話題提供者 / 記述形式	保育士発信		母親発信	
	継続有	継続無	継続有	継続無
事実伝達のみ	0 (　0.0)	30 (66.7)	19 (31.1)	22 (36.1)
所感	5 (11.1)	5 (11.1)	10 (16.4)	4 (6.6)
依頼・質問	2 (　4.4)	3 (　6.7)	2 (3.3)	4 (6.6)
合計	7 (15.6)	38 (84.4)	31 (50.8)	30 (49.2)
	45 (100.0)		61 (100.0)	

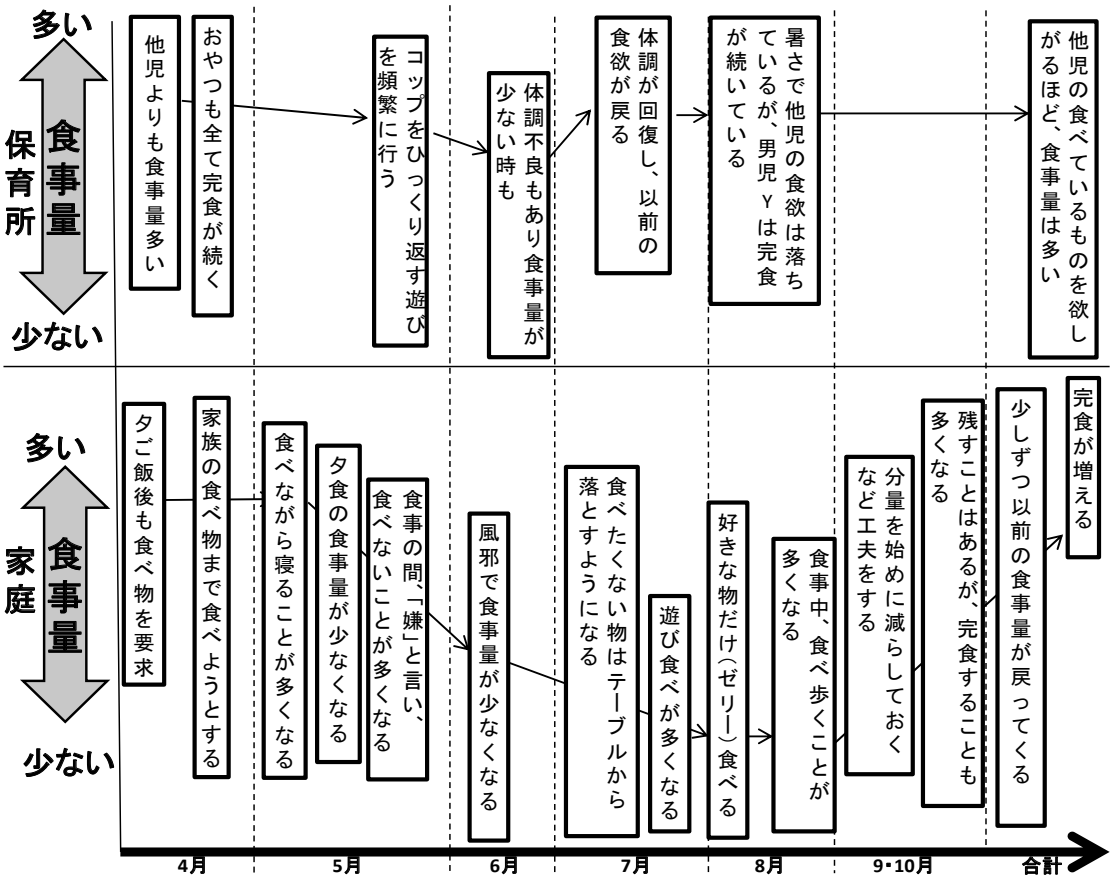
「子どもの様子」,「昨日の上段の記述に関して」,「依頼」,「質問」が生成された（中項目とする）．それらをさらにまとめていくと,「事実伝達のみ」,「所感」,「依頼・質問」(大項目とする）が生成された．

そして，話題提供者としての保育士または母親が記述した後のやりとりをその継続の有無別に分類し，記述数を示したのが表２である．なお，保育士・母親のどちらかが話題を提供し，それに対し，一方が連絡帳上で同じ話題について応答的な記述をした場合を継続有りとした．

やりとりの継続という観点からみると，母親発信の記述に対して保育士が応答する割合（「継続有」）は50.8%であったのに対し，保育士発信に対して母親が応答する割合（「継続有」）は15.6%であった．つまり，保育士Ｏが食事に関して連絡帳に記述し発信しても，母親Ｋはそれに対して継続して応答することは少なかった．

さらに,「継続有」を記述内容別に見ると，保育士Ｏが給食場面での男児Ｙの様子を事実だけ記述（「事実伝達のみ」）した際には，それに対する母親Ｋの応答はなかった．しかし，保育士Ｏが事実の伝達に加え，保育士Ｏの思ったことや感じたことを記述に加えると（「所感」)，母親Ｋは保育士Ｏの記述に応答することもあった．一方，母親Ｋが事実のみの記述をしても，保育士Ｏは母親Ｋの記述に応答する形で話題を継続させることが多かった．加えて，母親Ｋが記述する際，母親Ｋの感想も記述（「所感」）されていると，多くの場合保育士Ｏは母親Ｋの記述に応答していた．

次に，男児Ｙの食事量の変容に伴う，食事に関する話題提供者を表１の記述分類ごとに時期別に検討する．男児Ｙの食事に関するラベルとして，保育所７件，家庭14件が生成され，それらを男児Ｙの食事量の変容と合わせて，再度時系列に並べたところ図１が示された．図１から，保育所での食事量は４月から10月初旬まであまり変化は見られなかった．しかし，家庭での食事量は，遊び食べなどの影響もあり，７・８月は嫌いな物を残すことが多く，それに伴い食事量も少なかった．その後，８月下旬頃から少しずつ食事量が戻り，10月には再び完食が



		4月 継続有	4月 継続無	5月 継続有	5月 継続無	6月 継続有	6月 継続無	7月 継続有	7月 継続無	8月 継続有	8月 継続無	9・10月 継続有	9・10月 継続無	合計 継続有	合計 継続無
保育士発信	事実伝達のみ	0	6	0	4	0	3	0	8	0	5	0	4	0	30
	所感	1	1	1	1	1	1	2	1	0	0	0	1	5	5
	依頼・質問	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	2	3
	合計	2	8	1	5	1	4	2	10	1	6	0	5	7	38
母親発信	事実伝達のみ	1	4	3	5	1	3	5	4	5	3	4	3	19	22
	所感	2	0	1	1	2	0	2	2	1	0	2	1	10	4
	依頼・質問	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	2	4
	合計	3	5	5	7	3	3	7	7	7	4	6	4	31	30

＊表中の実数は件数

＊10 月の調査期間は 5 日間だったため、9 月と 10 月を合算したものを表に記入した

＊継続したやりとりが特に多くみられた箇所に網掛けをしている

図１．保育所・家庭別男児Ｙの食事量の変容に伴う連絡帳での話題提供者の記述形式ごとの継続有無

続くようになった．

そこで，図１に，男児Ｙの食事量の変容図に加えて，食事に関する話題提供者の記述分類別やりとりの継続有無を時期別に示した．図１から，男児Ｙの食事量が少なくなった７・８・９月（10月初旬の５日間含む）に，保育士Ｏは母親Ｋの記述に対して，特にやりとりを継続させようとしていることが示された（図１網掛け部分）．以上のことから，保育士Ｏは母親Ｋに比べて食事に関する話題に対してできるだけ応答し，一つの話題に関するやりとりを意図的に継続させようとしていることが示唆さ

れた．加えて，それは，特に家庭での子どもの食事量が少ない時期に顕著に現れていた．

そのため，保育士Ｏと母親Ｋの連絡帳の記述分類ごとの特徴をもとに，実際の保育士Ｏと母親Ｋの一連の継続したやりとりを分析することで，保育士の保護者支援の特徴を明らかにする．

(2) 保育士と母親の継続したやりとりの様相

保育士Ｏの意図が強く表れていると示唆された保育士Ｏと母親Ｋの継続的なやりとりに注目し，話題提供者の連絡帳の記述の中で，「事実伝達のみ」，「所感」，「依頼・質問」のそれぞれの特徴を有した事例を抽出し，そのやりとりを詳細に分析する．

1) 保育士発信の記述

保育士発信の記述のうち，「所感」と「依頼・質問」の形式による記述に対してのみ母親Ｋの応答記述がみられた．

①保育士の「所感」記述後のやりとり分析

表２から，母親Ｋは保育士Ｏから事実のみを連絡帳で伝えられても応答することはなかったが，男児Ｙの給食場面での様子について保育士Ｏの感想や思いも一緒に記述されていると，そのことに対して応答することが多かった．

事例１の時期において，男児Ｙの食事量は多いものの，観察をしていると他の子どもと一緒になってコップのひっくり返しをしている場面が多くみられた．事例1-1にみられるように，保育士Ｏは保育所での男児Ｙの良い面だけでなく，食事をきっかけとして気になった点，それに対する保育士Ｏの感想も含めて具体的に母親Ｋに伝えることもあった．それに対し，事例1-2では，母親Ｋも家庭での様々な男児Ｙの様子を伝えていた．この時期の男児Ｙは遊び食べが表れ始めていたが，食事量が極端に減少しているわけではなかった（図１）．そのため，母親Ｋはコップをひっくり返すというマイナスの意味合いを持つ男児Ｙの行動にもユーモアを交えて保育士Ｏに伝え

表３．事例１　保育士（所感）からのやりとり

事例1-1　５月26日保育士の記述 朝のおやつ：せんべいクッキー，お茶 給食：厚揚げのたまごとなめこのすまし汁（○），じゃがいものバター焼き（少し残る），バナナ（○） 昼のおやつ：お茶，かぼちゃケーキ 睡眠：12：30～14：20　体温：36.2度
今までコップひっくり返して飲み物こぼしている子を見ているだけのＹ君でしたが，今日はなんとＹ君がひっくり返してジャーデビューしました．えっＹ君までするようになったんじゃね！でした．日々の学習の実践はこれから続きそうです^^；アハハ…．
事例1-2　５月26日母親の記述 おやつ：ヨーグルト（１個），ゼリー（１個） 夕食：海苔巻きご飯（１杯），黒豆（一皿），納豆（３口），りんご（1/3個） 朝食：わかめおにぎり（小２個），とうふの味噌汁（１杯） 入浴：入った　睡眠時間：22：40～７：15　排泄：夜20：30 軟
夕ご飯を食べながら眠たくなり，寝るかなと思っていましたが，ゼリーの登場とともに目がパチリとして食べています．コップをジャー，さっきやってました．コップにお茶を入れたと思ったとたんに…キャーです．
事例1-3　５月27日保育士の記述 朝のおやつ：バナナシュガーフライ，お茶 給食：ししゃものからあげ，ごもく味噌汁，しらたきと野菜の甘辛煮，ネーブル→全部完食 昼のおやつ：お茶，お好み焼き 睡眠：12：25～14：50　体温：36.0度
やっぱりおうちでも即実践でしたか…ジャーと流す行為は自分の見えるところからそのものを消したいために行う行為のようです．だから，ジャーと繰り返したときは，目の前から取り除くようにしました．さて，その効果はどんなでしょう…？しばらく園でも様子を見ていきたいと思っています．
事例1-4　５月27日母親の記述 おやつ：ゼリー（1/2個） 夕食：海苔巻きご飯（１杯），厚揚げ煮物（２口），納豆（１パック），とうふの味噌汁（１杯） 朝食：おにぎり（２口），ふの味噌汁（１杯），飲むヨーグルト（１本） 入浴：入った　排泄：無し 睡眠時間：19：45～21：00，22：40～６：40
勉強になります．ジャーしたときはそのものを取り除いてみます．夕食中に睡魔が…そのまま寝始めました．

ることができている（事例1-2）．ここから母親Ｋが子育てにある程度余裕を持って男児Ｙに関わっていることが読み取れる．

一方で，このような母親Ｋに対し，保育士Ｏは給食場面で保育士Ｏが行っている対応を紹介するにとどめている（事例1-3）．保育士Ｏはインタビューにおいて，「連絡帳を通して，できるだけありのままの給食場面での男児Ｙの様子を伝えようとしている．ただ，（男児Ｙの）お母さんは，男児Ｙの食事に対しての不安が強いから，保育士の記述がお母さんの負担にならないようにも気をつけている」と語っていた．

事例１において，保育士Ｏは淡々と男児Ｙの行動を記すだけでなく，保育士Ｏ自身の気づきや思いをその都度記述しており，そのようなやりとりが母親Ｋの悩みや不安を表出させることにつながっていた．保育所を利用する保護者の中には，育児に自信が持てなかったり，精神的に負担感を抱えている保護者も多い[21]．だからこそ，食事という日常的で記述しやすい話題に対し，保育士がユーモアを加えながら母親の記述に応答することは，母親に安心感を与えるのではないかと推察される．

また，保育士が保護者に対して一方的に指導や助言を行うと，時間的・精神的に余裕を持ちにくい共働きの保護者を苦しめることとなり，そのような保護者の現状を理解しようとしない保育士に対して不信感を抱かせる危険性がある[22]．一方で，本事例においては，保護者との食事に関する同じ話題でのやりとりを続ける中で，保育士Ｏは母親Ｋに対して自然な文脈の中で助言や提案をすることができている（事例1-3）．以上のことから，連絡帳における食事を通したやりとりの中で，保育士Ｏは子どもだけでなく，母親Ｋの状態も把握した上で支援を工夫していることが示された．

②保育士の「依頼・質問」記述後のやりとり分析

保育士Ｏからの依頼や質問の多くは，アレルギー食品や牛乳を飲食してよいかや，飲食後の経過を尋ねるものであった．事例2-1で保育士は軟便だったにもかかわらず，牛乳を飲ませてしまったことを謝罪し，男児Ｙの体調を気にかけるよう母親Ｋにお願いしている．それに対し，事例2-2において，母親Ｋは不安や悩みを有する様子はなく，それどころか保育士の日々の関わりに感謝を示している．

もともと母親Ｋは，男児Ｙの食事量に対する心配が強かったことが保育士のインタビューから明らかになっている．特に，事例２は男児Ｙの食事量が減っている８月の記述である（図１）．しかし，事例２の一連のやりとりから，この時期の母親Ｋが男児Ｙの現状に焦ることなく，その原因や対処について客観的にとらえられていることが読み取れる．

林[23]は，連絡帳の継続したやりとりの中で保護者の書かれたことに対する読み取り方・受け止め方が変化し，保育士と保護者の関係が新たになり，それぞれが成長していく過程を明らかにしている．つまり，保育士Ｏは連絡帳で母親Ｋと食事に関してのやりとりを通して，食事に関する男児Ｙの変化だけでなく，母親Ｋの男児Ｙのとらえ方の変化に気づく契機にもなり得ていた．

2）母親発信の記述

母親Ｋが食事に関して連絡帳に記述した際，母親Ｋと比較し，保育士Ｏは母親Ｋの記述に応答することが多かった．以下では，保育士Ｏと母親Ｋのそれぞれのやりとりを詳細に分析する．

表４．事例２　保育士（依頼・質問）からのやりとり

事例2-1　８月11日保育士の記述 朝のおやつ：ぶどう，えびせんべい，牛乳 給食：五目厚焼き卵，わかめスープ，アスパラとじゃこの和え物，バナナ（→全部完食） 昼のおやつ：お茶，フルーツヨーグルト 睡眠：12：40～14：40　排泄：10：00 軟
すみません…うっかり軟便だったのに，おやつに牛乳をあげてしまいました．そしたらその後，だーっと軟便が出てしまいました．それからは便もなくお昼ご飯もぱくぱく食べてくれました．家でも引き続き様子をみてあげてください．
事例2-2　８月11日母親の記述 おやつ：飲むヨーグルト（１本），カップゼリー 夕食：カレーライス（1/2皿），バナナ（１本），春巻きサラダ（少し） 朝食：わかめご飯（１口），とうふの味噌汁（１杯） 入浴：入った　排泄：夜18：30 軟，20：00 下痢 睡眠時間：22：30～６：50
便→おそらく抗生剤を飲んでいるからゆるいんだと思います．本人がほしがれば少々の牛乳でも飲んでいいかと思っています．先生，いつもお気遣いありがとうございます．

表５．事例３　母親（事実伝達のみ）からのやりとり

事例3-1　７月23日母親の記述 おやつ：野菜ジュース 夕食：チャーハン（２口），ふの味噌汁（少し），ヨーグルト（１個），ゼリー（1/2個） 朝食：わかめご飯（小一杯），とうふの味噌汁（１杯） 入浴：入った　睡眠時間23：00～７：40　排泄　夜20：30 軟
夕ご飯，ミニトマトを出したのですが，口に入れては出すの繰り返し…．食べたのも好きなゼリーとヨーグルトのみ．
事例3-2　７月24日保育士の記述 朝のおやつ：オレンジ，せんべい 給食：牛肉のママレードいため，とうふとわかめの味噌汁，トマトサラダ，パイン（→全部完食） 昼のおやつ：ビスケット，サッポロポテト，アイス（１口） 睡眠：12：50～14：50　排泄：17：00 軟
今日のお昼ご飯にトマトのサラダがありました．「カープと同じ赤だね～」というと，にこっとほほえみながら食べていました．毎日暑いから花さん（０・１歳児クラス）みんな食欲落ちてますよ．汁物とデザートは別腹のようで，パクパクですけど…．水分とほしがるものをほしがるだけ食べていればいつか！と思っているＯ（担任の名前）です．
事例3-3　７月24日母親の記述 おやつ：野菜ジュース 夕食：ちらしずし（３口），高野豆腐（一皿），豆腐の味噌汁（１杯），ゼリー（１個） 朝食：ちらしずし（一杯），ふの味噌汁（１杯） 入浴：入った　睡眠時間22：15～７：20　排泄：20：30 軟
ジュースとゼリーの食べ具合はよいのですが，その他はほとんど遊びながら食べています
事例3-4　７月25日保育士の記述 朝のおやつ：すいか，とんがりコーン 給食：豚肉と野菜の味噌煮，パイン入りサラダ，わかめと卵スープ，ブドウ（→全部完食） 昼のおやつ：ツナチャーハン 睡眠：13：00～14：45　検温：36.4度　排泄：12：00 やや軟
アハハ…ですよね～．「いらんの」（「いらない」の意味）といっては椅子から立ち上がるんです．「じゃあこのお肉（誰かに）あげよっかな？」「Ｙさんの」と椅子に戻りぱくっ（と食べる）です．Ｙ君，朝ご飯は食べているようですし，園でも引き続き見ていきますね．

①母親の「事実伝達のみ」記述後のやりとり分析

７月下旬に記述された事例３は，遊び食べが多く見られ，家庭での食事量が極端に減っている時期である（図１）．

母親Ｋは，事例３の自由記述欄に男児Ｙの食事場面での様子のみを示しているが，その書きぶりから男児Ｙの食事中の行動に対し，あまり快く思っておらず，母親Ｋが苛立ちや不快感を生じていることが読み取れる（事例3-1，3-3）．そのため，保育士Ｏは男児Ｙだけ食事量が減っているわけではないことを母親Ｋに伝えて安心感を持たせようとしている（事例3-2）．また，事例3-4において，保育士Ｏは家庭からの連絡帳上段に書かれている食事の内容を指し，「朝ご飯は食べているようですし」と母親が気づかなかった子どもの頑張りや行動を発見し，記述している．

表２から，母親Ｋと比較して，保育士Ｏは母親Ｋから食事場面での男児Ｙの行動のみを記述されていても，それに対して保育士Ｏなりのコメントを記述し，やりとりを続けようとすることが多かった．特に，男児Ｙの食事量が少なくなり，母親Ｋの不安が記述に表れている時期は母親Ｋの記述に応答しようとする傾向が強かった（図１網掛け部分）．このことについて，保育士Ｏはインタビューの中で，「保護者の記述にはできる限り応えようとしている」と語っていた．

このような保育士Ｏに対し，母親Ｋは，事例3-3でも同じ内容で保育士Ｏに不安や悩みを表出している．つまり，保育士Ｏは同じく食事場面での男児Ｙの様子を見ている者として，母親Ｋが記述した悩みや不安に一つひとつ返答することで，家庭での男児Ｙの様子を知る機会を得ている．また，事例3-4のように，男児Ｙの良い面を母親Ｋに伝える契機にもなり得ている．

先行研究から，保育士の書き方によっては，保育士からの情報や考えが一方通行で終わりやすく[24]，保育士からの一方通行的な情報の提供によって保護者が知識を獲得したとしても，それが子どもの食事の変容に結びつきにくいこと[25]が指摘されている．一方で，乳幼児を育て

表６．事例４　母親（所感）からのやりとり

事例4-1　４月９日母親の記述 おやつ：飲むヨーグルト　（一本） 夕食：ランチパックのパン（１枚），大根と豆の煮物（２皿），豆腐の味噌汁（１杯），いちご（1/2パック） 朝食：おにぎり（１個），豆腐味噌汁（１杯） 入浴：入った　睡眠時間：21：40～７：15　排泄：19：45 普
夕食にパンパンとパンを見つけた途端…そのためおかしな組み合わせになってしまいました．相変わらずのすごい食欲と相変わらずの腹であります．あんなにごはんを食べなかったのに…今じゃその陰なしですね．笑
事例4-2　４月10日保育士の記述 朝のおやつ：ブドウジュース，リッツ，チーズ 給食：チキンの照り煮，パンプキンポタージュ，ミモザサラダ，パイン（→全部完食） 昼のおやつ：プリン，ビスケット 睡眠：10：15～10：30　検温：36.3度　排泄：10：00 軟
なんでもよ～くわかるＹ君です．「さあお片付けにしようか．おやつにしよう」というと，お友達はまだ遊び続けているのに，「はい！」と元気な返事をして，おもちゃの片づけをしてくれるんです．給食も睡魔と戦いながら今日も完食です！
事例4-3　４月10日母親の記述 おやつ：飲むヨーグルト（１本） 夕食：おにぎり（１個），大豆とこんにゃくの煮物（１皿），豆腐の味噌汁（１杯），いちご（1/4パック） 朝食：おにぎり（１個），ふとわかめの味噌汁（１杯） 入浴：入った　睡眠時間：21：45～７：15　排泄：19：30 普
保育園では良い子しているんですね．家ではいやいやしてますよ．
事例4-4　４月11日保育士の記述 朝のおやつ：クッキー，えびせんべい，お茶 給食：コロッケカレーあじ，かき玉五目汁，きのこのサラダ，ネーブル（→全部完食） 昼のおやつ：お茶，とうふ，団子 睡眠：12：40～14：40　排泄：９：00 普，12：00 普
あはは．もうじき魔の二歳児（第一反抗期）ですもんね～．気長に付き合ってあげてください．

る母親にとって，保育士に受け止めてもらえているという受容感は，保育士への相談の満足度にも影響を与える[26]．そのため，保育士Ｏは毎日の食事を通して母親Ｋの不安や悩みを見出し，連絡帳でのやりとりを通して，それらを受け止め，不安の軽減を図っているのではないかと考えられる．

②母親の「所感」記述後のやりとり分析

図１から，４月初旬記述の事例４は，家庭・保育所共に食事量が多かった時期である．事例４において，母親Ｋは，男児Ｙの食事量や食事に対する意欲の増加について男児Ｙの成長を喜んでいる．このような母親Ｋに対し，保育士Ｏは母親Ｋの喜びを受け止めるとともに，片付け時の男児Ｙの様子を記している（事例4-2）．つまり，保育士Ｏは食事の成長と連動させて他の生活場面での子どもの成長も母親Ｋに気づかせようとしている．これに対し，母親Ｋは食事以外の家庭での男児Ｙの様子や母親Ｋの悩みが垣間見られる記述をしている（事例4-3）．

１歳半児は自己主張が高まる時期であり[27]，子どもの変化に保護者が悩むことも多い．インタビューにおいて，保育士Ｏは「食事は日常生活のいろいろなこととつながっている．だから，母親が書きやすい食事の話題をきっかけに子どもの生活に関して話を広げることも多い」と述べている．そのため，保育士Ｏは１歳半児というこれから第一反抗期を迎える男児Ｙの変化に対する母親Ｋの戸惑いを連絡帳から見出しつつ，連絡帳の食事の事例を通して，男児Ｙの変化を母親Ｋにゆったりと受け止めさせようとしているのではないかと推察される（事例4-4）．

③母親の「依頼・質問」記述後のやりとり分析

母親Ｋからの食事に関する依頼や質問は，事例にみられるような朝食や牛乳提供のお願いなどであった．事例５も母親Ｋからの保育所で朝食を食べさせてほしいというお願いである．しかし，このような母親Ｋからのお願いに対し，保育士Ｏが自由記述欄に朝食を食べさせたなどの明確な応答をすることは少なかった．インタビューの中で，保育士Ｏは，「母親の質問には口頭で応えることも多いし，上段で記述される食事内容からある程度わかるため，それを母親Ｋへの返答としている．自由記述欄には，しっかりとその日の男児Ｙの様子や出来事を書くことの方を大切にしている」と語っていた．つまり，

表７．事例５　母親（依頼・質問）からのやりとり

事例5-1　8月17日母親の記述 おやつ： 夕食：おにぎり（２個），ゼリー，野菜ジュース，フォローアップミルク（100 ml） 朝食：バナナ×，おにぎり小（×），ぶどうとりんごのジュース（１本） 入浴：入った　睡眠時間：22：30～７：30　排泄：夜18：00 普
家でも元気に過ごしました．食事中椅子から立ち上がり…わざとしている様子です．今朝もなかなか起きず…ごめんなさい．朝ごはん食べてくれませんでした．少し朝食を持たせますのでお願いします．
事例5-2　8月18日保育士の記述 朝のおやつ：梨，えびせんべい，牛乳（○），（おむすび小，登園後すぐ） 給食：完食 昼のおやつ：ミルク（○），ヨーグルトケーキ 睡眠：13：00～14：50　検温：36.2度
おやつまで欲しがることもなく，過ごしました．おやつは内緒でちょっと多めにあげましたが…．お昼ごはんには関係ありませんでした．午前中，マヨネーズの空に水を入れ，水鉄砲もどきを楽しみました．

保育士Ｏは自由記述欄を，食事の話題を中心に，より詳しい保育所における男児Ｙのエピソードについて母親に伝える欄として活用しているといえる．

4. 総合考察

本研究は，偏食があり，遊び食べが多い１歳半の男児に関する保育士と母親の連絡帳でのやりとりを食事に焦点を当てて検討した．そして，保育士の子どもの食事に関する連絡帳を通した保護者支援の工夫や意図を明らかにすることを目的とした．

保育士と母親による「食事の連絡帳」の自由記述は「事実伝達のみ」,「所感」,「依頼・質問」に分類された．そして，保育士は母親の記述に応答し，母親とやりとりを継続しようとすることが多かった．特に，男児Ｙの食事量が減少している時期は，その傾向が強く見られた．

そこで，具体的に連絡帳での保育士と母親の一連のやりとりの詳細を見ていくと，保育士の「食事の連絡帳」を用いた保護者支援の特徴として次のことが見出された．

(1) 食事を通した保護者の心理的状態や変化の把握

乳幼児を育てる保護者の多くが，子育てに悩みを有しながらも，保育士を含めた専門家に悩みを相談することが少ないと報告されている[28]．特に，フルタイムで働きながら３歳未満児を育てる母親の多くは時間的な余裕もなく，保育士に相談する機会を得にくいと推察されることからも，保育士は連絡帳から保護者の悩みや不安を見出す必要がある．

本事例対象の男児Ｙは１歳半児であり，この時期は遊び食べや拒否行動が顕著に表れる時期である．それに対し，保育士は母親の記述にできる限り応答し，同じ話題に関するやりとりを継続しており，その中で，母親は食事を通して子育てに関する悩みを連絡帳上で保育士に表出することができていた．そして，保育士は連絡帳でのやりとりを通して，保護者の状況や気持ちなども踏まえた上で，保育士と保護者が子どもの食事に関して情報や意見を交換し合いながら，双方向的に連携して子どもに支援する関係を築くことができていた．

さらに，食事は食べる量や種類の増加など子どもの変化が目に見えてわかりやすい．加えて，連絡帳は毎日記述され，何度も読み直すことが可能であるため，母親の記述の変化も把握することができる．このことからも，食事に焦点を当て保育士と保護者が連携を取ることにより，保育士は子どもの変化だけでなく，保護者の考えや子どもへの対応の変化も把握することができていた（事例２）．そして，これらの情報を元に，保育士は保護者に対するとらえ方を見直したり，保護者への支援を臨機応変に変えることが可能となっていた．

特に，共働きの母親にとって，子どもとコミュニケーションを取りやすい食事場面は，子どもの様子を観察することができる貴重な機会である[29]．また，何をどのくらい食べたかなど，保護者が客観的に把握しやすいことから，連絡帳に記述しやすいと推察される．乳児の食事は，家族の就労状況，生活時間，家族関係など様々な生活の側面とつながっている．そのため，連絡帳で保育士と保護者が食事に関してやりとりをすることを通して，保育士は連絡帳から保護者の子育てへの心理的状態や子どものとらえ方の変化などを把握しながら，その時々の保護者に合わせた支援を行っていると考えられる．

(2) 食事を通して子どもの多様な側面を保護者へ提示

１歳半頃の子どもは第一反抗期に入りかけの時期である．それに伴う子どもの行動は食事場面でも顕著に現れ

る．このことに関して，保育士から保護者へ一方向的に注意や助言を与えられることは，保護者に精神的な圧力を感じさせたり，保育士との間に誤解を生じさせる恐れがある．

一方で，乳幼児の食事は生活の根幹であり，様々な行動や活動とつながっている[30]．食事場面における偏食や立ち歩き，アレルギーなどの問題は，個人的な問題であり，特に乳児期にはどの子どもも少なからず有している問題である[31]．つまり，食事という日常的に誰もが悩みを有しており，子どもの個々の能力に関係がない活動に焦点を当てることで，保育士は食事を通して保護者に対してさりげなく子育てに関する助言や提案を行うことが可能となっていた（事例４）．また，子どもは保育所と家庭の両方で食事を摂るため，事例３のように，保育士は偏食や立ち歩きなど食事に関する子どもの悩みを母親と共有し，母親の悩みに共感したり，励ましたりしやすい．このことから，保育士は母親と食事を通して子どもの成長を共に喜び支え合う関係を構築しやすかったと考えられる．

つまり，保育士は食事という保護者にとって身近で伝えやすい内容に，他の生活場面での子どもの成長を関連させた記述をすることで，子どもの多様な側面を保護者に間接的に伝えることが可能となっていた．そして，このような支援が，事例１や事例２のように，食事だけに留まらない保護者の子育てに対する安心感の醸成や保育士との信頼関係の構築につながっていることが示された．

以上のことから，保育士は保護者が意欲的に育児へ取り組めるように，乳幼児の食事の特性をあえて活用し，連絡帳の記述を工夫していることが明らかとなった．

本研究では，男児Ｙの保育士Ｏと母親Ｋの「食事の連絡帳」での記述内容を元に，食事場面の観察や保育士へのインタビューを併用し，詳細に分析した．そして，保育士が「食事の連絡帳」を用いてどのように保護者支援を行っているのか，その工夫や意図を明らかにすることで，保育士が保護者を支援する際の食事の新たな役割が示された．一方で，保育所には多様な保護者が存在している．そのため，子どもに対して熱心に子育てを行っている保護者だけでなく，保育所に一任する傾向のある保護者に対して，保育士がどのように保護者支援を行うのかも検討する必要があるだろう．

謝　辞

本研究の観察，調査に快くご協力くださいました保育園の園長先生をはじめとする教職員の皆様，子どもたち，保護者の皆様に心よりお礼を申し上げます．また，本研究をまとめるにあたり，ご指導をいただきました広島大学大学院教育学研究科　七木田敦先生に厚く御礼を申し上げます．

引　用　文　献

1）綾部園子，小西史子，大塚恵美子．朝食からみた幼児の食生活と保護者の食事意識．栄養誌．2005, **63**, 273-283
2）小口将典．3-4歳児の保育所における食育―家庭への支援を見通した実践に向けて―．医療福祉研究．2009, **5**, 33-43
3）Moore, S. N.; Tapper, K.; Murphy, S. Feeding strategies used by mothers of 3-5-year-old children. Appetite. 2007, **49**, 704-707
4）木田春代，武田文，朴峠周子．幼児の母親における幼少期の食生活と現在の偏食との関連．日公衛誌．2012, **59**, 112-119
5）長谷川智子，今田純雄．幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデルの検討．小保研．2004, **63**, 626-634
6）松生泰子，佐田恵子，恵村洋子，梶美保，豊田和子．食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善―乳児保育の質的向上をめざして―．保育学研究．2007, **45**, 115-124
7）大岡貴史，内海明美，向井美惠．乳幼児の保護者が感じる食行動の問題点と食事の楽しさとの関連．小保研．2013, **72**, 485-492
8）大岡貴史，石川健太郎，村田尚道，内海明美，弘中祥司，久保田悠，拝野俊之，山中麻美，横山重幸，小倉草，星野美恵子，野本富枝，向井美惠．離乳期の食事についての保護者の疑問や不安に関する実態調査．口腔衛生会誌．2009, **59**, 7-15
9）松尾寛子．在園児と保護者に対する子育て支援を見越した関係構築のあり方についての基礎的研究―保育所等における登降園時の子どもの預かり方と返し方について―．神戸常盤大学紀要．2014, **7**, 1-8
10）久保桂子．保育園児を持つ母親の仕事と子育ての葛藤．千葉大学教育学部研究紀要．2015, **63**, 279-286
11）前掲　2）
12）半澤幸恵．保育所における幼児連絡帳にみる保育者と保護者の関係変容プロセス．中部教育学会紀要．2015, **15**, 30-39
13）林悠子．保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義．保育学研究．2015, **53**, 78-90
14）広沢洋子，清水玲子，角藤智津子．保育者と保護者の相互交流―連絡帳を通して―．運動・健康教育研究．1996, **6**, 8-14
15）高向山，若尾良徳．保育所と家庭を結ぶ連絡帳―対人コミュニケーション機能に注目して―．常葉大学健康プロデュース雑誌．2015, **9**, 93-98
16）大森世都子，八倉巻和子，髙石昌弘．幼児の食生活に関する研究―保護者および保育園長の食意識の比較―．小保研．2000, **59**, 72-82

17）伊藤優．乳児の食事改善における連絡帳の役割―保護者の意識に焦点を当てて―．小保研．2017, **76**, 86-92
18）宮武宏治，高原望．重度・重複障害児と教師の相互関係の変容過程の分析．特殊教育学研究．1991, **29**(2), 53-67
19）川喜田二郎．発想法―創造性開発のために―．中央公論社，1967
20）前掲　18）
21）植木存，中野美雅．子育て意識に関する調査―保育所を利用する母親に対するアンケートから―．高田短期大学紀要．2008, **26**, 99-110
22）鈴木佐喜子，堀江まゆみ，若松美恵子，喜多村純子．保育者と親の食い違いに関する研究―保育，子育ての問題を中心に―．保育学研究．1999, **37**, 200-208
23）林悠子．連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程．乳幼児教育学研究．2009, **18**, 121-132
24）剣持安里，山内紀幸．保育者と保護者の連携―0歳児～2歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して―．山梨学院短期大学研究紀要．2005, **26**, 43-53
25）鈴木秀子．子どもから家庭へつなぐ食育―保護者の「学び」からの検討―．会津大学短期大学部研究年報．2010, **67**, 129-147
26）笠原正洋．園の保護者による保育者への援助要請行動―満足度および援助要請意図の関連―．中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要．2006, **38**, 19-26
27）厚生労働省．保育所保育指針．フレーベル館．2008
28）中西伸子，牛尾禮子．乳幼児を持つ養育者の「子育て支援」に関する要望．奈良看護紀要．2013, **9**, 13-22
29）外山紀子．発達としての＜共食＞―社会的な食のはじまり―．新曜社，2008
30）江田節子．幼児の朝食の共食状況と生活習慣，健康状態との関連について．小保研．2006, **65**, 55-61
31）前掲　8）